

# 朴景利『土地』に描かれた日本・日本人像

Portrait of Japan and the Japanese in Park Kyongri's *Toji*

申 銀珠\*

## 目次

- はじめに
- 一 研究史の検討
- 二 抑圧的な他者、〈日本〉
  - (1) 民衆の声
  - (2) 日本の知性への眼差し
- おわりに

## はじめに

日本統治期、朝鮮半島には最大時75万人の日本人がいたといわれている。彼らはどのような顔をもっていたのであろうか。同じ生活空間に生きる日本人と朝鮮人。その間には単なる支配・被支配の図式だけでは語りきれない、様々な人間関係が生まれたはずである。支配者の顔と隣人の生活者の顔をもっていたはずの日本人の姿を韓国文学はどのように描き出しているのだろうか。本稿では、小説的<sup>フィクション</sup>日本論<sup>1</sup>ともいわれる朴景利(1926～)の代表作『土地』に描かれた日本・日本人像について考察したい。

25年という長い執筆期間(1969.9～1994.8)、607回にわたって連載された全5部25編361章という膨大な量、700人もの人物が登場する『土地』は、朝鮮王朝末期から植民地時代末期(1987年～1945年)までの朝鮮半島の苦難の歴史を民衆の様々な姿を通して幅広く描き出した大河小説である。小説の空間も、主人公西姫の一家、崔参判家の屋敷のある慶尚南道河東郡岳陽面平沙里からソウル(当時は京城)、日本、満州へと拡大していき、崔参判家の四代にわたる栄枯盛衰の物語が縦に展開する中で、多様な登場人物の相互関係が作り上げる様々な物語が横の幅を増幅していくスケールの大きい作品である。また、文学作品としての評価とは別に『土地』は、作者自身の日本観・日本人観が色濃く反映された作品でもあり、われわれ読者に日本帝国の朝鮮支配の実体を民衆の目線で考えなおすきっかけを提供してくれる。

## 一. 研究史の検討

朴景利『土地』の日本語翻訳は、第1部だけが、1983年から86までの4年にわたって安宇植・鎌田光登訳で全八巻として福武書店から刊行された。しかし未だ日本語で書かれた研究論文は皆無である。ここではまず、本題に入る前に、韓国での研究の流れを簡単に紹介したい。

連載期間25年、発表誌を7回も変えながら完成した『土地』は、研究史においても完成以前と以後とで大きな変化が見られる。作品が完結する以前に書かれた論文は、主にジャンルの性格に注目したものが多く、これは、『土地』をどのような観点から分析することができるかという一次的問題に直結するからであろう。この時期の研究は、歴史小説として読む観点と総体小説として読む観点の二つに大きく分けられる。

歴史小説として読む 송재용(ソン・ジェヨン)「小説の広さと深さ」(『文学と知性』1974春号)「成長する民族イメージ」(『文学と知性』1980夏号)、김철(キム・チョル)「運命と意志—『土地』の歴史意識」(『文学の時代』第3巻1986)、정호웅(チョン・ホウン)「『土地』論—智異山の思想」(『東西文学』1989・12)「解放後の歴史小説の成果」(『小説と思想』1993夏号)等の論文は、文学作品としての『土地』を高く評価する一方、ル

<sup>1</sup>「日本論として書かれた小説」鄭顯琦・安宇植訳『韓国・朝鮮の文学Ⅱ』(『週刊朝日百科 世界の文学』112) 2001.9)

〈弱肉強食の論理—明治の日本はセンチメンタルな正義を装ったが—で侵略行為を合理化するなら、文化と未来のための文明の意味はどこにあるのか。〉『土地』にみられるこのような問いかけは、あらゆる生命の平等な存在意義、存在の尊厳性の追求という作品全体の主題につながる、と述べている。

カチの歴史小説論を評価の軸としたリアリズム観点から歴史小説としての限界を指摘している。特にチョン・ホウンは、『土地』にみられる運命論的な世界観が歴史小説としての完成度を落としていると批判的に論じている。

これらに対し、임현영 (イム・ホンヨン) 「近代韓国史の変革主体の模索—『土地』の作品世界とその思想」(『月刊京郷』1987.8) 「恨の歴史と民衆の歴史」(『我々の時代の小説を読む』(図書出版グル、1992) では、運命論的な世界観だとして批判されてきた部分を歴史的必然性として解釈し、風俗史、変革主体の形成、登場人物の典型性を描く均衡のとれた描き方を高く評価している。이태동 (イ・テドン) 「小説『土地』を語る」(『月刊朝鮮』1980.7) は、朴景利の強い歴史意識が作品を成功に導いた、と評価している。

김병익 (キム・ビョンイク) 「『土地』の世界と葛藤の真相」(『韓国文学』1977.6) 「恨の民族史と葛藤の社会史」『恨と生—『土地』批評1』(ソル出版社、1994)、정현기 (チョン・ヒョンギ) 「朴景利の『土地』研究I—作品形成の思想的柱」(『메지論叢』10集、1993)、『『土地』解釈のための論理立て』(『作家世界』1994秋号) 等は、歴史小説としてではなく総体小説、大河小説、民族史小説として評価すべき、としている。特にチョン・ヒョンギは、『土地』を分析するにあたって西洋の文学理論の代入は正しくないと主張、〈マディ (節) 理論〉を通した作品分析を試みている。彼が定義しているマディとは、個人の自我が向かい合った世界との関係価値を築き上げていく最小単位であり、始まりと過程と終わりはあっても全体に向けてつきあがる西洋悲劇のような絶頂はなく、一人一人の人物を囲んでいる社会的、歴史的、地理的、心理的環境変化の断片というものである。この〈マディ (節) 理論〉は、『土地』全体の主題論とは別に、伝統芸能パンソリの享受者がそうであるように、作品内部の名場面一つ一つに注目することで『土地』の文学性をより高く評価している点でその独創性が見られる。

この他にも文学の外側からの分析を試みたものとして 강만길 (カン・マンギル) 「文学と歴史」(『世界の文学』1980冬号) がある。歴史学者であるカン・マンギルは、歴史学と歴史文学との差異を前提として『土地』が史料にこだわらなかったから、かえって歴史的真實に近づくことができた、と高く評価している。

『土地』が完成した1994年以降の研究は、作品全体の性格を論ずる方向に偏っていた完成以前の研究に比べて、内容の意味分析から主題、人物、思想、作家の歴史意識など、様々な側面から作品を読み解いていく試みにその特徴が見られる。

チョン・ヒョンギの〈マディ (節) 理論〉をより発展的にとらえた 이승운 (イ・スンユン) の論文「朴景利の『土地』研究」(延世大修士論文、1994) は、西洋の文学理論には当てはまらない『土地』固有の構造を伝言、伝聞、後日談形式、省略法などに注目し分析している。個々人の生活から韓国近代史の総体的な姿を描き出した『土地』の文学史的意義は、韓国の伝統的なものを継承発展したところにあるとして、部分の独自性を重視するパンソリ様式の継承をその証拠として提示している。特にこの論文は『土地』の日本論としての側面について積極的に論及しているところに注目したい。최유찬 (チェ・ユチャン) 「『土地』を読む」(ソル出版社、1996) は、『土地』解釈のための独創的な理論を確立するための試みという意味で、チョン・ヒョンギ、イ・スンユンの延長線上のものと言えよう。チェ・ユチャンは、部分から全体を解釈するのではなく、全体から部分を解釈しなければならないとし、太極の陰陽五行説と宇宙のビッグ・バン理論に基づいて『土地』のジャンル上の特性、作品の構造、統一性、伝統と思想、創造的本質など、総合的な考察を試みている。

この他にも『土地』の主題に関する研究として、チョン・ホウン「『土地』の主題—恨・生命・大慈大悲」(『恨・生命・大慈大悲』ソル出版社、1995)、황현산 (ファン・ヒョンサン) 「生命主義小説の美学—『土地』の文学性」、우찬제 (ウ・チャンジェ) 「地母神の想像力と生命の美学」(チョン・ヒョンギ編『恨・生命・大慈大悲—『土地』批評2』ソル出版社、1995) などが挙げられる。恨、生命主義、神秘的想像力などが根幹となったこれらの主題論は、作品内部の登場人物の分析に繋がるものでもあり、例えば、신덕룡 (シン・ドンニョン) 「『土地』の生と歴史I—恨を抱くことと解くことを中心として」(チョン・ヒョンギ編『恨・生命・大慈大悲—『土地』批評2』ソル出版社、1995) は、『土地』は家族史と歴史の出会いであり、その出会いこそ恨の発生に繋がるとした上で、恨の克服の様相について、登場人物金環、吉祥、月仙を例に挙げて論じている。

양문규 (ヤン・ムンギュ) 「『土地』にあらわれた作家意識—民族主義と恨を中心として」(『『土地』と朴景

利文学」韓国文学研究会編、ソル出版社、1996）は、『土地』にあらわれた作家意識を恨と民族主義に根付いたものとした上で、植民地現実に抵抗する有力な主体として民衆の本能的な抵抗意識をいかなるイデオロギーの抵抗性より優位のものとして描いていると論じている。この他に人物論と主題を直接結びつけて論じたものに 권오룡（クオン・オリョン）『『土地』の人物と歴史意識』（チョン・ヒョンギ編『恨・生命・大慈大悲—『土地』批評2』ソル出版社、1995）がある。クオン・オリョンは、登場人物の生を植物的な生と動物的な生に大別するという独特な分析を行った上で、作家朴景利の農耕文化への愛着はこの大地に根を下ろしている循環的生命の強韌さに対する温かい眼差しに象徴されるものであり、動物的な生は根本的に物質文明を先立たせた侵略勢力である〈日本〉の正体に他ならない、と述べている。

以上の先行論文からもわかるように、『土地』についてはすでに作品の主題、登場人物、作家精神など、様々な角度から論じられている。しかし、膨大な量の作品であるだけに、これらの先行研究の成果を踏まえた上で、主題論に縛られない多様な解釈、細部にこだわる緻密な分析などが今後の残された課題といえよう。

## 二. 抑圧的な他者、〈日本〉

### （1）民衆の声

それでは『土地』に描かれた〈日本〉はどのようなものか、について考えたい。前にも述べたように、『土地』には日本に対する様々な言及が見られる。しかし、韓国でも実際これに関する本格的な研究は殆んどなされていない。その理由として考えられるのは、一つは、あまりにも広範囲で膨大な量の作品であるだけに、それぞれの場面に散りばめられている日本関連言説を一つの論理でまとめることが極めて困難である点、もう一つは、文化相対主義という今日の価値観から見て簡単に受け容れられないほどの露骨な日本蔑視の言説が多く見られていて、日本関連言説だけに注目した場合、作品全体の文学作品としての魅力や評価を害してしまうという心理的負担を研究者自身背負わなければならない点があげられよう。私自身、この論文を作成していく中で最も悩まされたところでもあるが、しかし、これらの課題は韓国が誇る国民文学たる『土地』の全体像を正しく把握し、今、そして今後、それを正しく評価するためには避けて通れない課題であることは間違いない。本稿はその一つの切り口を提示するための試論であることをお断りしたい。

朴景利は『土地』に託した歴史意識について次のように述べている。

『土地』の歴史意識というものを私なりに述べますと、こんなことが言えると思います。私たちは、韓日併合を恥辱と思っていますが、精神的な次元で考えると必ずそう思う必要はないということです。国を奪われたこと自体は精神的な次元では恥辱ではないということです。例えば、心の優しい人が無防備状態で自分のものを奪われたとしてそれがどうしてその人の恥辱になるのでしょうか。もちろん無能だとは言えるかも知れませんが。しかし儒教的な立場や宗教的な立場から見ると、必ずしも無能というものでもありません。李朝五百年の政治をみると、一種の教化君主政治で、ある意味では、理想的な政治哲学のようなものを持っていました。そのような理想が現実には敗北したわけですが、少なくとも精神は清いもので、きれいなものでした。ところが日帝は野蛮にも拳銃を突きつけ大砲を撃ち、この大地を蹂躪しました。これがどうして日本の誇らしい歴史といえるのでしょうか。<sup>2</sup>

一個人であれ民族であれ、存在そのものの尊厳は外部の〈力〉によって傷つけられてはいけない。抑圧する側の力は、いくら文明の名を借りてもその実体は野蛮そのものである。朴景利は、〈近代〉という名に隠された、文明と野蛮、先進と後進、優秀と劣等、多数と少数、中心と周辺など、二分論法を基礎とする近代主義の支配の論理に内在する矛盾と限界を辛辣に批判している。

〈青年期までの私の人生は根こそぎにされた不当な悲しみと強要された日本の物で剥製にされていた〉<sup>3</sup>と

<sup>2</sup> 対談金治洙「著者との対話『土地』の朴景利氏『所有の関係からみた恨の源流』（『新東亜』1981.6）（原文韓国語。翻訳は申。以下同じ）

<sup>3</sup> ソン・ホグン「生への憐憫、恨の美学」『作家世界』（1994.秋号）

語る朴景利自身の言葉からもわかるように、作家の内面に根強く内在化したこのような歴史認識は、『土地』では主に民衆のレベルでの近代批判、反日感情の露骨な噴出という形で随所に描かれている。例えば、く開明というものは大したものではないぜ。一言でいえば、人を殺す道具がいいということだけであって、人のものをむやみに奪い取ることが開明というもののだ。<sup>4</sup>と、弱肉強食の近代主義の本質を批判する大工ユンボの素朴な言葉、く昔は私達の前で跪いて喪服を借りていった奴等じゃないか。奴等の着物は私達の喪服を借りて作ったものじゃないか。<sup>5</sup>と、飲み屋で閔妃暗殺に対する怒りを吐き出す旅商人の日本文化に対する蔑視、く日本人は不倶戴天の敵じゃ。人間の皮を被っているから人間というだけであって、三綱五常も知らない獣よりも劣った奴等、私は、たとえ懐に一銭もなくても日本人の荷物は絶対に担ぎません。<sup>6</sup>と語るチゲクン（背負子で荷物を運ぶことを業とする人）老人の怨念に満ちた言葉など、その例は実に多い。このような日本に対する民衆の本能的な怒り、赤裸々な反日感情の表出は、解放60年という歳月を経て、21世紀におけるアジア共同体結成の意義、交流と越境に基づいた共生・共存の言説が当たり前のように語られている今日においては、極めて時代錯誤的な言説に他ならないが、『土地』の時空間に生きる民衆の立場からはごく自然なものであったのである。一章で紹介したヤン・ムンギュの指摘どおり、朴景利は、民衆の本能的な抵抗意識こそ植民地現実に立ち向って戦う有力な主体であるとし、いかなるイデオロギーの抵抗性より優位のものとして描いているのである。

『土地』4部の連載に関連して、朴景利はあるインタビューで次のように語っている。

解放されてから今日にいたるまで、我々は口先では反日を叫んできたけれど、日本とは果たして何なのかについては全然分析していないと言っても過言ではありません。日本人だからといって特別な種子があるわけでもない。日本人だろうがどんな民族だろうが、それぞれ特有の特性をもつようになるには当然歴史的な必然性があります。日本に関してはわが民族が一番よく知っているはずです。残酷な植民統治を受けたし、また大勢の東京留学生を持っているではありませんか。それにも関わらず、解放後今日にいたるまで日本に関する研究業績がないのはおかしいと思います。多分留学生たちが客観性を失った、いわば親日派の範疇から逃れられなかったことにその原因があるように思います。<sup>7</sup>

誰よりも日本をよく知っているはずなのに自らの客観性を失ってしまいがちな、東京留学生に代表される近代韓国の知識人の精神的構造を厳しく批判している朴景利にとって、『土地』を書くという行為は、日帝時代の経験者としての内在化した反日感情を思想として肉化することであったと言える。抑圧するあらゆる力に抵抗し自らの尊厳を守りぬくことは、日本支配下における朝鮮の人々にとっては独立への念願、人間回復への意志に他ならないが、だからと言って『土地』に描かれている反日・親日は必ずしも善悪に二分化するような単純なものではない。

この恨みを晴らすためならどんなことでもやってみせる。わが家、わが土地を取り戻すためならどんなことでもやれる。北風が吹きまくるこの満州まで来て、独立運動なんか付和雷同して故郷に帰れない身になるものか。私の魂をここに埋めることは、絶対にできないんだ。恨みを晴らすためなら親日でも喜んでやるよ。（中略）私の唯一の願いは崔参判の家を取り戻すこと、恨みをはらすこと。泰山より高く大海より深いこの恨みを晴らせないのなら私の命はないも当然よ。<sup>8</sup>

奪われた財産を取り戻し故郷の平沙里に帰るためなら、そして恨みを晴らすためなら、だれに何と言われようが、親日行為も辞さないと、西姫は心の中で叫び続ける。これは、別堂の母親が下男の子を九泉と駆け落ちした

4 本稿では『土地』1～21巻（ナナム出版、2002）をテキストとする。本文引用は申が訳した。以下、巻数とページだけを明記する。

〈1〉 p.133

5 〈1〉 p.383

6 〈15〉 p.107

7 対談崔滌周『「土地」は終わりのなき物語』（『月刊京郷』1987.8）。

8 〈5〉 p.214～215

あと、小間使い貴女と没落両班金平山の陰謀で父親崔致洙が殺害され、唯一の頼りだった祖母尹氏夫人まで疫病で亡くし一人ぼっちになった、そして先代の莫大な財産を遠縁の趙俊九に根こそぎ奪われた西姫の個のレベルでの怨念の表出に他ならないが、『土地』における西姫と平沙里の象徴性を考えると、親日行為も辞さないという西姫の言葉は作品全体に拡散する重層的な意味をもつものとして解釈してもよからう。

## (2) 日本の知性への眼差し

『土地』には緒方次郎をはじめ、三十数人の日本人が登場する。憲兵、警察幹部、教師、下女、芸者など多様な階層の日本人が朝鮮人と同じ時空間で生活する存在として立体的に描かれている。コスモポリタニズムの心棒者であり、関東大震災の時、朝鮮人学生を助けてくれた緒方次郎は、社会主義読書団体の啓明会の事件で西姫の夫吉祥、任明姫の教え子柳仁実といっしょに検挙された唯一の日本人であり、柳仁実に純愛を抱きつづける人物である。『土地』の4部、5部では、緒方次郎、柳仁実、親日貴族趙ジョンモ男爵の次男趙燦夏、趙燦夏の兄趙容夏、その友人諸文植の対話、趙燦夏の内面独白などを通して日本論、日本文化論が幅広く展開される。中には畳とオンドル、和服と韓服の美の比較、日本と韓国の建築美の違いなど、題材そのものの陳腐さだけでなく、語り手と作者との距離が殆んど感じられない叙述の上に、自国文化優越主義がにじみ出ているところもあって客観性に乏しく説得力に欠ける部分も少なくない。『土地』の文学作品としての魅力を半減してしまう所以でもあるが、日本の日本たるものの歴史的必然性を分析してみせるという作家自身の強い意図が読みとれるだけに注目しなければならない部分も多い。特に4部の、1929年元山労働者ストライキ、満州事変、南京虐殺などの歴史的イベントを背景に知識人グループによって繰り上げられる時局批判や日本の天皇制に対する論争は、作家朴景利の対日観、言い換えれば『土地』に描かれた〈日本論〉の中心をなすものと言えよう。

それではまず、諸文植が緒方次郎に向けて、日本の天皇という名称、天皇制と日本人の関係について冷笑的に疑問を投げかける場面から見てみよう。諸文植は、〈日本という島国のいわゆる万世一系、面々と受け継がれてきた統治者の称号だが、(……)いくら考えてみても蟻が傘をさしている様、荒唐無稽もほどがある。〉<sup>9</sup>と、天皇という用語の虚構性を指摘する。近代日本の根幹を成してきた天皇制は、天皇という用語に表れているように、政治権力と宗教的価値観が入りまじって生み出した独特な権力構造の頂点を象徴するものであり、日本の近代的民主主義の限界と矛盾を内包している、と作者は登場人物諸文植を通して語っているのである。さらに、〈日本という国では、天皇と戦争に関することならいつも意見が一致する〉<sup>10</sup>、〈日本には民族主義のようなものはない。(……)軍国主義と皇道主義が主なのだ。民族主義とは外敵からの侵略を絶えず受けて、闘って、自分の国を守っていく中で芽生えてくるもの。(中略)日本の伝統的なその刀と皇国思想、刀は力に、皇道主義は名分に姿を変える〉<sup>11</sup>と、諸文植に語らせ、日本の天皇制は他ならぬ近代日本の膨張的国家主義を支える思想と情緒を生み出したこと、そしてこれは自民族を守るための民族主義とは区別されなければならない、と主張する。語り手によって、一銭も損をしようとししない現実主義者、悪人と評されている諸文植であるが、この議論の場面の役割からみて、諸文植は当時の朝鮮人一般の日本の天皇・天皇制に対する冷ややかな態度、反抗精神を代弁するために意図的に作られた人物であることは間違いない。日本人一般にとって天皇制とは果たしてどういう意味をもつものかについて、作者は、〈日本にも裕仁君と呼ぶソシアリストもいるし、君主制撤廃を叫ぶボルシェビキもいる〉と語る緒方次郎の言葉を通して、戦前の日本の社会主義、共産主義運動の展開にあらわれた反天皇制主張の実体を認めながらも、しかし皇国主義が決して支配階層の支配論理に留まるものではなく、日本人一般の生活感情の中に染み付いたものであるという事実を指摘する。

以上のように、日本の天皇制についての抽象的な議論の中で、自分の国を守るための民族主義とは異なる、近代日本の支配者としての膨張的で差別的な皇国主義に対する厳しい批判がなされているが、このような議論は、後につづく趙燦夏が緒方に親日貴族としての苦悩を語る場面で、朝鮮の独立、日本の共産主義運動と天皇制廃止論、急進的知識人の一人中野重治の話など、より具体的で真摯な対話へと発展する。少々長いですが、その

<sup>9</sup> <15> p.22

<sup>10</sup> <15> p.26

<sup>11</sup> <15> p.28

場面を次に引用しよう。

燦夏の顔は歪んだ。自虐は極に達したようだった。

「殺されても、終身禁固刑にされても構いません。私が根を下ろした祖国が独立するなら、私はどうなってもいいんです。どうせ私が属している階層はなくならなければならないんだから。しかしあなたが言っているように小川ではなく大雨になったとしても日本は決して変わらないでしょう。天皇制廃止を主張する急進派の中にも朝鮮独立について語るものは殆んどいないし。」

「何をおっしゃるんですか。ここにいないじゃありませんか。」

慌てて緒方は自分の胸を指した。そして二人は一緒に笑う。東洋人特有に感情を入れない声だけの笑いを。

「中野重治もいますよ。〈雨の降る品川駅〉、辛よ さようなら 金よ さようなら 君らは雨の降る品川駅から乗車する、あの詩を書いた中野重治。」

中野重治は詩人、小説家、評論家であり、ナップ（全日本無産者芸術団体協議会）に所属した人だ。〈雨の降る品川駅〉は朝鮮の独立と独立運動への熱い支持を描いた詩である。

「私も『改造』でそれを読みました。緒方さん、あなた本当にコスモポリタンですか。そういえば、啓明会の事件に巻き込まれて投獄までされたんだから、間違いないでしょうけど。」

燦夏は杯をおき、たばこをくわえる。

（中略）

「緒方さんが朝鮮の独立を望んでいるその友情を私は信じます。でも、どうでしょう。進歩的思想をお持ちのあなた、天皇を否定することが出来ますか。」（中略）

緒方は慌てる。不意の襲撃を受けた人みたいに、一瞬、なすすべを知らない。

「正直に申し上げて、そ、それは、まだ深く考えたことはありませんが、……多分難しいでしょう。」

「……」

「それがほとんどの日本人の限界ではないでしょうか。」

緒方の顔に曖昧な表情が浮かんだ。二人はしばらく無言のまま酒を飲む。黙って酒を飲んでいるうちに二人の間には互いの弱点を哀れむ不思議な愛情のようなものが芽生えてくるのであった。<sup>12</sup>

コスモポリタンであり、朝鮮の女性柳仁実（にみ）に純粋な情熱を抱いている緒方次郎、朝鮮の独立を願う真の友情をもっている、天皇・天皇制を否定することはできない緒方次郎という人物像を通して、朴景利は、近代日本と朝鮮の、支配と被支配という関係に深く内在する日本の天皇、天皇制に対する両側の認識の違いを指摘しているのである。

当然のことながら、朝鮮人にとって日本の天皇は、日本帝国主義と同格の、無機質な制度としての存在でしかなかった。天皇の制度としての存在によって日本帝国は成立したのであり、それが他民族を支配するイデオロギー装置として徹底的に堅持されてきたのである。日朝同祖論や内鮮一体論を掲げた日本帝国に、創氏改名をさせられ、ご真影と呼ばれる天皇の写真と日の丸の前で皇国臣民の誓詞を毎日唱えさせられ、文字通り皇国臣民になれる〈恩恵〉を与えられても、生理的に、天皇個人に対する人種的同胞感覚をもつことはできない。天皇の名において行われた植民地支配、天皇の名において始まった戦争、天皇の名において終わった戦争、その戦場に駆り立てられた日本帝国の皇国臣民たる植民地朝鮮の〈女〉と〈男〉たち。その植民地朝鮮の〈女〉と〈男〉たちの〈声〉は、深いこだまとなって、新たな記憶の戦争を生み出している。この事実を目を向けなければ、被支配者側への真の理解は生まれない。〈進歩的な思想をお持ちのあなた、天皇を否定することが出来ますか。〉—これは他ならぬ朴景利自身の日本の知性に対する厳しい問いかけのように私には思われる。

ここで趙燦夏が読んだとされている『改造』（1929.2）に掲載された中野重治の「雨の降る品川駅」について簡単に述べよう。『改造』に発表された「雨の降る品川駅」は伏字だらけのものであった。以下、その全文を

紹介する。

雨の降る品川駅

中野重治

×××記念に 李北満 金浩永におくる

辛よ さやうなら

金よ さやうなら

君らは雨の降る品川駅から乗車する

李よ さやうなら

も一人の李よ さやうなら

君らは君らの父母の国に帰る

君らの国の河は寒い冬に凍る

君らの反逆する心は別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて夕暮れのなかに海鳴りの声を高める

鳩は雨に濡れて煙のなかを車庫の屋根から舞ひ下りる

君らは雨に濡れて君らを、、、、、、、を思ひ出す

君らは雨に濡れて 、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、を思ひ出す

降りしぶく雨のなかに緑のシグナルは上がる

降りしぶく雨のなかに君らの黒い瞳は燃える

雨は敷石に注ぎ暗い海面に落ちかゝる

雨は君らの熱した若い頬の上に消える

君らの黒い影は改札口によぎる

君らの白いモスノは歩廊の闇にひるがへる

シグナルは色をかへる

君らは乗り込む

君らは出発する

君らは去る

おゝ

朝鮮の男であり女である君ら

底の底までふてぶてしい仲間

日本プロレタリアートの前だて後ろだて

行つてあの堅い 厚い なめらかな氷を叩き割れ

長く堰かれて居た水をしてほとばらしめよ  
 そして再び  
 海峡を躍りこえて舞ひ戻れ  
 神戸 名古屋を経て 東京に入り込み  
 、、、に近づき  
 、、、にあられ  
 、、、  
 、、顎を突き上げて保ち  
 、、、、、、、、、、  
 、、、、、、、、  
 温もりある、、の歓喜のなかに泣き笑へ

『改造』の当時の編集者上林暁は、当時の状況を次のように回想している。

それより問題になったのは、詩「雨の降る品川駅」であった。一字一句おろそかに出来ない絶唱であった。そして、検閲に引っかかる心配があった。この詩全体が引っかかると言ってもいい。ぼくらは鳩首協議したが、満身伏字だらけであった。<sup>13</sup>

〈検閲に引っかかる心配〉から満身伏字だらけにならざるを得なかった「雨の降る品川駅」は、『改造』に発表されて3ヶ月後、東京で刊行されたハングル雑誌『無産者』（1929.5）に韓国語に翻訳され掲載された<sup>14</sup>。満身伏字だらけの形になる前のもとの原稿がどのような経緯で『無産者』編集者の手に入ったのか、誰がそれを訳したのか、などは未だ不明であるが、ハングルという武器を利用して編集者の誰かがぎりぎりのところまで翻訳し掲載したのが韓国語訳「비날이는品川驛」だったのである。『改造』の伏字の部分を完全に復元することは、元の原稿が発見されないかぎり不可能なことであろうが、『無産者』の韓国語訳は現在のところ、伏字部分を復元する唯一の手がかりとなっているのである。『無産者』の韓国語訳を反訳して伏字部分を埋めると、5連はく君らは雨にぬれて君らを逐う日本の天皇を思ひ出す／君らは雨にぬれて 彼の髪の毛 彼の狭い額 彼の眼鏡 彼の髯 彼の醜い猫背を思ひ出す〉となり、最終連のく神戸 名古屋を経て 東京に入り込み〉につづく殆んど判読の不可能な末尾の数行は、く彼の身邊に近づき／彼の面前にあられ／彼を捕へ／彼の顎を突き上げて保ち／彼の素首 そこに鎌先を突付け／満身の奔る血に／温もりある復讐の歓喜のなかに泣き笑へ<sup>15</sup>となる。

いくら伏字としたとしてもそれが安全を保障してくれるものではない。石堂清倫が指摘しているように、当時『改造』が当局によって摘発されなかったのは全くの偶然<sup>16</sup>であった。『無産者』もそれは同じであろう。もし摘発されたならば、『改造』同様、作者も編集者も翻訳者も、執筆禁止や出版停止の処分ですまされなかったかも知れない。当時の状況を考えると、この詩の存在そのものが、これに関わった人々の命がけの思いを語ってくれているものと言えよう。中野が「雨の降る品川駅」に託した限りない惜別の情と支配者への怒りと反逆の精神は、当時の朝鮮人の心に強く深く響き、韓国語に生まれ変わって、再び我々に跳ね返る。それが

<sup>13</sup> 上林暁「見残した無尽蔵」、「新日本文学」（新日本文学会、1979.12）

<sup>14</sup> 詳細については、拙稿を含む以下の論文を参照していただきたい。

・満田郁夫、林淑美、趙珉淑、申銀珠「『雨の降る品川駅』のテキストについて、及びそれをめぐる議論についての共同研究」

『梨の花通信』（中野重治の会、2001.4.7.10）

・拙稿「中野重治、詩的精神の憤怒の行方―く君らの叛逆される心は別れの一時に凍るをめぐって」『国文学』（學燈社、2002.1）

<sup>15</sup> ここでは注14にあげた共同研究での訳（『満田』版）を借用した。

<sup>16</sup> 石堂清倫「中野重治と社会主義」（勁草書房、1991）



『無産者』を介して可能だったことは、まさに当時、日本と朝鮮の〈連帯〉に夢を託した〈精神〉が存在していたことを我々に物語ってくれる。

朴景利自身『改造』の「雨の降る品川駅」の形をどれほど意識していたか、また、『土地』の作品の時空間において、当時の『改造』の読者として想定されている趙燦夏が果たして伏字の部分をどのように受け止めていたかは、上の場面だけではわからない。しかし語り手が「雨の降る品川駅」を〈朝鮮の独立と独立運動への熱い支持を描いた詩〉と解釈しているところは、『無産者』掲載以来続いている、韓国での「雨の降る品川駅」の受容の一面を確認できるという意味でとても興味深い。

緒方はさらに中野重治について、〈中野重治のような人は珍しいです。中野はコミュニストですが、私は西行の流れに結びつけたいです。美しさは清浄で真実で優しいものであり、悲しみは、対象に対する悲しみは、ヒューマニティーではないでしょうか。そのような精神も日本の中にあります。〉<sup>17</sup>と語っている。自らマルキシストと呼びつづけた中野重治を、イデオロギーの枠組みを越えて最も人間的な領域において高く評価する緒方の言葉には、「雨の降る品川駅」の世界を含め、緒方次郎という人物を通して日本の知性を具体的に描こうとした作者の戦略的な意図が反映されていると言えよう。

緒方次郎は趙燦夏からの厳しい質問を受けてはつきりとした答えが出せなかったが、くしかし彼はその問題について開陳したい気持ち<sup>18</sup>になる。コスモポリタンとしての自分の良心と現人神としての天皇の存在が新たな葛藤を生み出し、苦しむ。以後、緒方次郎は10年間に満州各地を放浪する中で、柳仁実との間で子供が生まれたこと、その子供を趙燦夏と彼の妻則子が大切に育てていることを知る。趙燦夏に会って自分の息子の養育を続けて頼む席で緒方は、〈(日本は) 滅びるべきです。人間らしく生きていける歴史の変革のために、人類のために滅びるべきです。〉<sup>19</sup>と悲痛な思いで語る。緒方次郎にとって日本帝国は無残にも〈個〉の幸せを抹殺する暴力的な存在に過ぎなかった。緒方次郎はそのことを、愛する女性柳仁実と息子莊司との再会を夢見ながら実感する。

## おわりに

趙燦夏、緒方次郎、諸文植、柳仁実等の登場人物を通して語られる日本論は、東学農民運動を、朝鮮民族の生存と自尊を守り通した民衆の力として位置づけている『土地』全体の主題と無関係ではない。日本という〈抑圧的な他者〉、それを前に朝鮮民族の尊厳は悲惨にも崩れ落ちた。その歴史的事実を作家朴景利は、東学の平等思想、民族の〈恨〉、生命の創造という価値観を通して見つめなおしている。

『土地』は、緒方次郎という人物に日本の知性の可能性を託しながら、緒方次郎と柳仁実との愛、息子莊司の存在を通して日本と朝鮮の民族の〈負〉の遺産を克服する可能性を残している。民族や国家の違いを超えて、〈個〉としての主体性を知覚し実践する緒方次郎は、『土地』に描かれた日本論が必ずしも排他的民族主義の議論に終わらないということを示してくれる貴重な存在である。また、緒方次郎の人物像に中野重治とその文学的成果が色づく反映していることは、作品内部にリアリティーを与えるだけでなく、実際の時空間に生きた人々の思いを甦らせる効果を生み出すものと言えよう。

一方、本稿では詳しい言及は省略したが、『土地』は日韓比較文化的言説において自民族中心の文化的優越意識を随所に露呈している。自己と他を区別する何らかの優越意識によって支えられる民族主義の限界はそのままテキスト『土地』の文学的限界といわざるをえない。それをいかに克服していくかは、われわれ読者に残された課題といえよう。

17 <15> p.160

18 <15> p.159

19 <18> p.217